

地平線のかなたに非同盟と平和がみえる

トリコンチネンタル(三大陸社会調査研究所)

2022年9月27日

[Looking Over the Horizon at Nonalignment and Peace \(thetricontinental.org\)](https://thetricontinental.org)

ウクライナを発端として、コントロール不能なインフレが発生するなど、さまざまな災難が発生している。直接の当事者でない地域でも、物価上昇の影響は大きく、政情不安は避けられない。こうした中、(前英労働党首の)ジェレミー・コービン氏が代表を務める研究機関「平和と正義プロジェクト」は、「三大陸社会研究所」と「グローブトロッター」、「モーニングスター」の2つのメディアと協力し、非同盟と平和の概念について考察するシリーズを作成した。ロジャー・マッケンジーとビージェイ・ブラシャードによる最初の報告に続き、このシリーズでさらに問題が探求する。

本シリーズは、2022年4月から7月にかけて「グローブトロッター」と「モーニングスター」に掲載、配布された論考を、2022年9月に冊子で発表するためトリコンチネンタル(三大陸社会調査研究所)で更新したものです。

1, 今こそ非同盟と平和のために

ロジャー・マッケンジー

ビージェイ・ブラシャード

戦争は、人間の経験の中で醜い部分である。戦争にまつわるすべてが醜悪である。戦争とは、明らかに侵略行為であり、その作戦に伴う残虐行為である。精密な戦争などありえない。すべての戦争が民間人を傷つける。砲撃のひとつひとつの行為が、社会に神経的な戦慄を走らせる。

第二次世界大戦は、この醜さをホロコーストと広島・長崎への原爆投下で示した。ヒロシマとホロコーストから2つの巨大な運動がおこった。一つは平和を求め、さらなる核攻撃の危険性に反対する運動、もう一つは人類の分断に終止符を打

ち、分断から非同盟に向かう運動である。1950年のストックホルム・アピールは、3億人近い人々が署名し、核兵器の絶対的な禁止を訴えた。その5年後、世界人口の54%を占めるアフリカとアジアの29カ国がインドネシアのバンドンに集まり、戦争に反対し、"相互利益と協力の促進"を求める10項目の誓約書にサインした。バンドン精神とは、平和と非同盟のことであり、世界の人々が、社会の富を利用して、歴史の重荷(非識字、不健康、飢餓)を取り除くプロセスの構築に力を入れることであった。教室や病院にお金を使うべきなのに、なぜ核兵器にお金を使うのだろうか。

植民地主義から生まれた多くの新しい国々が大きな成果を上げたが、古い植民地支配国の圧倒的な力によって妨げられたため、バンドン精神が人類の歴史を決めることにはならなかった。それどころか戦争の文明が優勢になった。この戦争文明は、何百もの惑星を破壊することができる武力の生産に人類の富を大量に浪費し、紛争解決の最初の衝動としてこれらの武力を使用することに現れている。こうした野心の戦場は1950年代以降、ヨーロッパでも北米でもなく、むしろアフリカ、アジア、ラテンアメリカになってきた。イエメンでの戦争は普通だがウクライナでの戦争は恐ろしいというような人間を国際的に分割するようなやり方が、私たちの時代を特徴づけている。世界では40の戦争が起こっている。ヨーロッパでの戦争だけでなく、あらゆる戦争を終わらせるためにたたかう政治的な意志が必要だ。西側にはウクライナの国旗が至る所に見られるが、イエメンの国旗、サハラ・アラブ民主共和国の国旗、ソマリアの国旗は何色か人びとは知っているだろうか。

平和への回帰、非同盟への回帰

最近、まことしやかに流される現実離れした見方に困惑させられる。ロシアのウクライナ戦争が続く中、交渉は無駄であるという見方は不可解だ。理性的な人びとはすべての戦争は交渉で終わらせるべきだとの意見で一致しているのに、このような見方がまかり通っている。それなら、なぜ即時停戦を呼びかけて、交渉に必要な信頼関係を築かないのだろうか。交渉は、すべての側に敬意があり、軍事衝突のすべての側に合理的な要求があることを理解しようとする場合にのみ、実現可能になる。ちなみに、この戦争をロシアのプーチン大統領の気まぐれと描くことは、永久戦争の味方をする事だ。ウクライナに対する安全保障は必要であるが、ロシアに対する安全保障も必要であり、それには真剣な国際軍備管理体制への復帰が含まれるであろう。

平和は、単に私たちが願うだけでは訪れない。思想と制度の塹壕の中での戦いが必要なのだ。権力をもった政治家たちは、戦争から利益を得ている。だから彼らはマチズモに身を包んで、戦争の減少ではなく、さらなる戦争を望む武器商人たちの代理をするのだ。官僚制の青いスーツを着たこれらの人々に、世界の未来を任せてはならない。彼らは、気候の大災害に関して期待を裏切り、パンデミックに関しては期待を裏切り、平和創造に関して期待を裏切る。私たちは、平和と非同盟の古い精神を呼び起こし、それをこの惑星の唯一の希望である大衆運動の中に生かしていかなければならない。

今日の非同盟運動に生命を吹き込むために過去に立ち戻ることは、単なる感傷ではない。すでにアフリカ、アジア、ラテンアメリカの一部では、現在の矛盾が非同盟の亡霊を出現させている。これらの国々の多くは、ロシア非難に反対票を投じた。それはロシアのウクライナ戦争を支持しているからではなく、むしろ分極化が致命的な誤りであると認識しているからである。必要なのは、冷戦時代の二大陣営の世界に代わるものである。中国の習近平、インドのナレンドラ・モディ、南アフリカのセリル・ラマフォサなど、多くの国の指導者が、政治的志向は大きく異なるものの、「冷戦メンタリティ」からの脱却を訴えているのはそのためである。彼らはすでに新しい非同盟のプラットフォームに向かって歩き始めている。このような歴史の動きが、非同盟と平和の概念への回帰をわれわれに促しているのである。

米国とその同盟国が中国とロシアを包囲すればどうなるか。誰もまともに想像したくはない。ドイツや日本など米国と密接な関係にある国でさえ、中国とロシアに新たな鉄の幕が下りれば、自国にとって致命的であることは認識している。すでに、戦争と制裁は、ホンジュラス、パキスタン、ペルー、スリランカに深刻な政治的危機をもたらし、食糧と燃料の価格が天文学的に上昇するにつれて、他の国々もそれに続くだろう。戦争は、貧しい国々にとってあまりにも高価なものである。戦争のための支出は人間の精神をむしばみ、戦争そのものが人々の絶望感を増大させる。

戦争屋は理想主義者である。彼らの戦争は、人類の主要なジレンマを解決しない。一方、非同盟と平和の考え方は現実的である。彼らの枠組みは、食べること、学ぶこと、遊ぶこと、夢を見ることを望む子供たちに対する答えを持っている。
(了)

筆者のロジャー・マッケンジーは「モーニングスター」紙記者。英国で最も古い人権団体の一つであるリベラシオン事務局長。ヴィジェイ・プラシャードは、インドの歴史家、編集者、ジャーナリスト。